

論文

『息子と恋人』再考

——ポールと「黒い男」ウォルター・モレルの絆——

山田 晶子

要 旨

D.H. ロレンスの第3作目の長編小説である『息子と恋人』は、これまで多くの研究者によって論じられてきたが、中でも中心となっている論は、主人公ポール・モレルと彼の母親であるガートルード・モレルの関係が、精神分析学の権威フロイトの唱えたエディプス・コンプレックスの説を応用して解釈できるとするものであり、この論者の代表者として、結末において母親が亡くなった今、ポールはどうしたらよいか途方にくれて生きていく力がない、とする A.B. クットナーと、ポールは母親の死をものともせずに生き抜いてゆくであろうとする D.A. ヴァイスがいる。筆者は、『息子と恋人』の主題をエディプス・コンプレックスとして捉えるのではなくて、本作品にも『白孔雀』、『不倫』とつながっている黒い神と黒い男の主題が更に発展して存在するものとして論じる。そして「黒い男」としてのポールの父親ウォルター・モレルがポールの成長及びロレンスの思想の発展に大きな意味を持っていることを論じる。

キーワード：炎（火）、闇、白い花、赤い花、太陽、黒い男、笑い、ダンス、自然との交感

序

D.H. ロレンスの第一作目の小説『白孔雀』(*The White Peacock*) 及び第二作目の小説『不倫』(*The Trespasser*) を論じるに当たって、筆者はこれら二作品における黒い神 (*The*

Dark God) の萌芽を主題として論じた。この主題は、ロレンスの出世作であり世界的な名作として認められている第三作目の小説『息子と恋人』(*Sons and Lovers*) にも、前作品よりも更に明白に表われていると考えられる。黒い神は、第8作目の小説『カンガルー』(*Kangaroo*) においてたびたび登場しており、また第9作目の小説『羽鱗の蛇』(*The Plumed Serpent*) においてはいつそうはっきりとした神であるケツアルコアトルとして登場しているが、ロレンスの初期・中期の小説には明白な形では登場していないため、その主題は初期・中期の小説においてはこれまで研究者によって無視されてきたと思われる。しかし筆者は、初期の第1作目からすでに黒い神の萌芽がジョージ (George) やアナブル (Annable) という男性に見られ、また第2作目でもシーグマンド (Siegmond) にそれが表われていることを指摘した。そして第3作目の『息子と恋人』の重要な登場人物であるウォルター・モレル (Walter Morel) には、黒い神の思想が「萌芽」というよりも更に大きくなって小木ほどに成長した形で入っていると思われる。

黒い神の特徴は、前2作品を論じたときに述べたように、精神性に対立する性愛の神であってかつ男性性を重視しており、他の研究者がロレンスの神を定義するとき述べているようにディオニュソスに連なる神であることである。『息子と恋人』においては、キリスト教的精神性を代表するガートルード・モレル (Gertrude Morel) と、彼の夫であり官能的な男性であるウォルター・モレルが対比されて登場しており、ウォルターは、若いときのその生命力に満ち溢れた温かな炎の燃える肉体と黒い体毛に表わされる「黒さ」によってロレンス的「黒い男」と考えられ、黒い神に仕える男性に属する人と思われる。

『息子と恋人』は、これまでロレンスの自伝的小説であると言われてきたが、自伝そのものではないことに注意しなければならない。ロレンスは1912年11月9日付けのエドワード・ガーネット (Edward Garnett) 宛の手紙において次のように書いている。

A woman of character and refinements goes into the lower class, and has no satisfaction in her own life. She had a passion for her husband, so the children are born of passion, and heaps of vitality. But as her sons grow up she selects them as lovers---the eldest, then the second. These sons are urged into life by their reciprocal of their mother---urged on and on. But when they come to manhood, they can't love, because their mother is the strongest power in their lives, and holds them.

.

The son decides to leave his soul in his mother's hands, and like his elder brother, goes for passion. He gets passion. Then the split begins to tell again. But almost unconsciously, the mother realizes what is the matter, and begins to die. The son casts off mistress, attends to his mother dying. He is left in the end naked

of everything, with the drift towards death. (*Letters I* 477)

上に引用した手紙を読んで、研究者の中には『息子と恋人』の主題はエディプス・コンプレックスを中心とするものであり、主人公のポール・モレル (Paul Morel) は母の愛の束縛に苦しんでいるのだと考えている者がいる。たとえば A.B. クットナー (A.B. Kuttner) と D.A. ヴァイス (D.A. Weiss) は、このようなフロイト的解釈をしているが、両者はこの小説の結末の解釈の仕方において異なっている。手紙にあるように、結末でポールは誰よりも愛した母親の死に直面して今後どのように生きたらよいのか途方にくれているという解釈がカットナーのものであり⁽¹⁾、一方ヴァイスはポールはそれでも新しい人生を目指して生き延びてゆくという解釈をしている⁽²⁾。

しかし筆者は、『息子と恋人』の主題は必ずしもエディプス・コンプレックスという枠組みにはまらない所があると捉える。ロレンスは、『『チャタレー卿夫人の恋人』について』というエッセイにおいて、人間は宇宙の律動に呼応した結婚を送らなければならないし、また男根を基にした性愛を重視し、精神と肉体の均衡を保ち、現代の神経症的性愛の形ではなく「血」に基づいた性愛を大切にすることの必要性を述べている⁽³⁾。『息子と恋人』には早くもこの宇宙の律動との呼応や血と肉の性愛の哲学が書かれていると思われる。本論では、ガートルード・モレルが「精神性」を表すのに対してウォルター・モレルは「血と肉」を表しており、小説の前半では前者が後者を押しつぶしてゆくが、後半ではポールは生き延びることによって父親的生の本質を受け継いでゆくのであり、母親よりも父親が重要な存在であるというロレンスの哲学が表われていることを論じようと思う。

Ⅰ ウォルターの「黒さ」とガートルードの「白さ」

ロレンスが「王冠」というエッセイで述べているように、矛盾する性質のものの均衡が彼の理想の生である。矛盾する性質の象徴はユニコーンとライオンとして述べられている⁽⁴⁾。言い換えればこれら二つのものは光と闇であり、昼と夜であり、精神と肉体であり、理性と官能性であり、女性と男性であり、水と火であり、キリスト教の神と異教の神々を指す。そしてこれら二つの相反する性質はいつも戦っている。『息子と恋人』においては対立するこれら二つのものが、またいろいろな形で表されている。ゆえに、闇と光の闘争の主題が、この小説でも描かれていると言えよう。

黒い神という異教の神とキリスト教の白い神の闘争は、「残念にも、彼女はあまりにも彼の正反対の存在であった」(SL25) と書かれているように、最初にウォルター・モレルとその妻であるガートルード・モレルの闘争に表われていると考えられる。ウォルターは炭坑

夫なので、毎日石炭を掘って地下の世界で働いている。6時前に起床して炭坑へ出かけ、夕方仕事が終わるとパブで酒を飲んで、帰宅が10時ごろになる彼は、ほとんどいつも家の外で生活をし、暗がりの中に存在していると言ってよいであろう。また、彼の体は石炭の粉に覆われて黒くなっている。このように彼の生活は「黒さ」を特徴としているが、また、彼の身体的な特徴も黒い。彼は「波打つ黒い髪」(SL 17)と「豊かな黒いあごひげ」(SL 17)を持ち、血色が良い頬と「赤い濡れた口」(SL 17)をしていると書かれている。ウォルターの黒さと赤さに包まれた外観は、『チャタレー卿夫人の恋人』の主人公であるメラーズ(Mellors)を思い出させる。ジョージ・フォードやボルニッツも指摘しているように、ウォルターは文字通り、そして象徴的に「黒い男」である。ウォルターは、異教的な要素を備えた人物である。つまり彼は妻が嫌う酒が大好きである⁽³⁾。

When she was twenty three years old she met, at a Christmas party, a young man from the Erewash Vally, Morel was then twenty-seven years old. He was well-set-up, and very smart. He had wavy, black hair that shone again, and a vigorous black beard that had never been shaved. His cheeks were ruddy, and his red, moist mouth was noticeable because he laughed so often and so heartily. He had that rare thing, a rich, ringing laugh. Gertrude Coppard had watched him fascinated. He was so full of colour and animation, his voice ran so easily into comic grotesque, he was so ready and so pleasant with everybody. Her own father had a rich fund of humour, but it was satiric. This man's was different: soft, non-intellectual, warm, a kind of gamboling. (SL 17)

上の引用では、ウォルターがガートルードと出会ったばかりのクリスマスパーティのときの彼の様子が描かれており、彼の若さの美しさと自然な温かさや生命力が出ている。彼の声が「グロテスク」と書かれているが、黒い神に仕えるロレンスの「黒い男」には既成の価値観を破って新しさを確立しようとする常識をはみ出すところがあるので、それが常識内で生きる人々にとっては「グロテスク」と見えるのであろう。清教徒という既成の価値観に縛られているガートルードにはゆえにウォルターの笑いが「グロテスク」と映ると思われる。しかし、ウォルターは、『息子と恋人』においては、黒い神に仕えることができないまま、妻に負けていく男であり、この点にメラーズとの相違点が表われている。ピューリタンの妻ガートルードは、夫に禁酒の誓いをさせたのであるが、彼は結婚早々にその誓いを破ってしまい、その後毎日のように酒を飲んで家へ帰ってくる。

そしてまた彼は、これも妻が嫌いなダンスが大好きである。ダンスと酒が大好きで、帰宅しては暴力を振るうウォルターは、ギリシア神話に登場するディオニュソスを思い出させる。ロレンスは、ディオニュソスをいろいろな作品で書いており、賛美している。ボル

ニッツは、ディオニュソスは、ロレンスが作品で言及している神に一番近い性質を備えた神であろうと述べている⁽⁴⁾。また、パトリシア・メイヴェルは、ロレンスの作品におけるパン神を研究しているが、ポルニッツは、このパン神がロレンスの黒い神の一つの定義であるとしている⁽⁵⁾。ロレンスは、『白孔雀』から『チャタレー卿夫人の恋人』に至るまで、特に後期になって彼の唱える闇の世界と関わらせてパン神を頻繁に書いているので、パン神はロレンスの黒い神を表わすことは正しいと思われる。そしてパン神はディオニュソスと深い関わりを持っている。つまりパン神はディオニュソスの従者なのである。頭に角を生やし、上半身は人間の男性であって下半身は毛におおわれたヤギの姿であるパン神は、野原に住み牧羊の守護神であると考えられている。メイヴェルは、初期の作品ではなくて1924～26年を中心とする後期の作品に頻繁に登場するパン神を研究しており、初期の作品のパン神は「地方的」(local)な存在であったが、後期の作品では、文字通り「普遍的な」(universal)な存在になっているとして、ロレンスのパン神の描き方の変化を述べている⁽⁶⁾。「パン」(Pan)という言葉はギリシア語で「全てを含む」という意味であり、たとえば『羽鱗の蛇』においてドン・ラモンは宗教はキリスト教のみでなく、あらゆる異教の宗教も認めるべきであると言って、カトリックの司祭に詰め寄っている。『息子と恋人』においては、ウォルターにはディオニュソスの要素が見られるのみでなく、彼が野原をさ迷ったり自然が好きであるという例から、パン神の要素をも備えていることへと繋がっている。自分の字が書くのがやつとであるというウォルターは、知的な要素が少ないのだが、それに対して肉体的な官能性を豊かに備えた男性である。ディオニュソスやパン神が好きなダンスは、言葉(知性・精神性)を超えた人間のコミュニケーション方法であり、知性が豊かでないウォルターは、ダンスをすることによって人間との理解を求めているのである。哲学的に、ダンスは生の衝動を表し、矛盾するもの、つまり魂と肉体、見えるものと見えないもの、生と死を結びつける働きをする。ダンスの意味は、ロレンスが求めているものと同じものなのである。それゆえに、ダンスは、彼の作品では重要なコミュニケーションの働きをしているのである。ダンスを非常に好むウォルターは、ロレンスが肯定するタイプの人間であると考えてよいであろう。ウォルターは祭りを好み、機嫌が良いときには陽気である。彼は官能的な世界に生きており、しばしば心から笑い楽しいことを好む。また、彼は馬が好きであり、大工仕事も好きである。

しかし、彼にも欠点がある。彼には教養がなく、性格が弱くて約束を簡単に破り、嘘をつき、暴力をふるい、妻の財布から金をくすねたりする。考えることができず、忍耐強くないのである。ゆえに、息子のポールがモデルにできる男性ではない。均衡を求めると言っているポールは、ロレンスの代弁者であると考えられるが、ウォルターには、「光」で表わされる面の要素が欠けているため均衡を欠いているのである。

次に、妻のガートルードについて考察してみよう。彼女は教養がある宗教性が強い女性である。

She herself was opposite. She had a curious, receptive mind, which found much pleasure and amusement in listening to other folk. She was clever in leading folk to talk. She loved ideas, and was considered very intellectual. What she liked of all was an argument on religion or philosophy or politics, with some educated man. This she did not often enjoy. So she always had people tell her about themselves, finding her pleasure so. (SL17)

上の引用に見られるように、ガートルードは非常に教養があつて学のある男たちと宗教や哲学や政治について話すことを好むタイプの女性なのであるが、いつも身近にそのような男性がいるわけではないので、周囲の人間に彼ら自身について話をさせて聞き役に回ることが書かれているが、ここには「支配的」な女性、またその当時としては男性の世界に入ることが好きな新しい女性としてのガートルードが見られる。このような男性と対等であろうとする彼女は、しかし、血筋から言って、禁欲的で誇り高い精神力が強い女性であるため、男性にも高度な精神性を求めることになる。

And, having an end house, she enjoyed a kind of aristocracy among the other women of the 'between' houses, because her rent was five shillings and sixpence instead of five shillings a week. (SL10)

上の引用では、「自分は他の奥さんたちとは違って上の位置にいるんだ」というガートルードの上昇志向が満たされている心理を描いている。「貴族」的な高さを求める彼女の姿は、夫や息子たちが産業社会で出世していくことを強く願うことに繋がっていく。彼女は精神的で男性的な強い女性なのである。

だが、ウォルターに出会う以前に付き合っていた裕福な商人の息子であるジョン・フィールドからもらった聖書を一生大事にしていたということから、敬虔な清教徒であることが分かる。ジョン・フィールドは金のために彼女と別れていく。聖職者になるという望みも捨てる。ガートルードが男に対して抱いていた夢はこのようにして砕けた。ここで注目すべきは、彼女はフィールドよりも強い女性なのである。「もし私が男なら何も私を邪魔するものはないでしょうに。」(SL16) と言って、聖職者になることを諦めたフィールドをなじる彼女は、男よりも強いといえる。そしてフィールドに幻滅した彼女は「男であるということは全てを意味しないのだ」(SL16) と悟るとき、彼女の男というものに対する姿勢がうかがえる。つまりガートルードは、女性の社会的地位が男性よりも低かった時代

においてすでに男性よりも精神的に上位にいる女性である。また、男性と宗教や哲学や政治について対等に議論することを好んだ女性ということから新しい女性であり『チャタレー卿夫人の恋人』に登場するコニーやヒルダと同等の女性であると思われる。しかし『息子と恋人』においては、コニーに対するメーラズは登場せず、ウォルターを支配する女性として、つまり「黒い男」の芽を摘んでゆく女性として描かれている。彼女は標準英語を話すのだが、ウォルターは方言を喋る。彼の方言は、コニーに対して方言を使うメーラズを思い出させる。ガートルードは夫を道徳的で宗教的にしようと務めるがそれは不可能である。彼女は徐々に彼を軽蔑し破壊する。そして夫を捨てて息子に夢を託そうとする。ガートルードは聖母マリアのタイプの女性である。「未来を見ても、彼女はあたかも自分が生きてまま埋められているかのように感じられるのであった」(SL14) という引用からも、彼女は悲しげな性質を持っていることが分かる。ウォルターが比喩的に「黒い性質」を持った人間であるのに対してガートルードは「白い性質」を持っており、白い光に包まれている。ウォルターの「ろうそくの炎のような金色の柔らかな官能的な光」に対して、ガートルードは「白熱の光」を持っている。ロレンスが、『息子と恋人』が出版される少し前の1913年1月にエドワード・ガーネットに宛てて書いた手紙に見られる「僕の偉大な宗教は、知性(intellect)よりも賢明なものである血と肉への信仰です」(*Letters I* 503) という文章からも、彼が重視しているのは、ガートルードの清教徒的厳格な精神性よりも、ウォルターの柔らかく温かな肉体性であると思われる。ガートルードもフィールドに失恋した直後にウォルターに出会ったときは彼の存在の素晴らしさを認めたのである (She looked at him startled. This was a new tract of life suddenly opened before her. She realised the life of the miners, hundreds of them toiling below earth and coming up at evening. He seemed to her noble. He risked his life daily, and with gaiety. SL19)。このように彼女は極限状態に置かれたときには、物事の真実を見ることができたのだと言えよう。しかし結婚すると現実の人生のしがらみが降りかかってくるので、二人の男女からは人間の真実が隠されてしまうのであろう。ロレンスの中編小説『王女様』(*The Princess*) において、王女の父親が述べた「人間から全てを剥ぎ取ったときに残るデビル (人間の本質)」こそが、結婚前に二人が相手に見たものとして存在していたのだ。

そして結婚した二人には悲劇が待ち伏せしていた。禁酒を夫に守らせようとして失敗したガートルードは、次々と夫に幻滅するばかりである。「彼女の誇り高い名誉心の強い魂の中で何かが彼女を岩と同じぐらい硬化させた」(SL21) という引用は、夫が家具の支払いについていまだ未払いなのに払い終わったと嘘をついていたことを知ったときの、彼女の心理を述べている。「硬化した」(「crystalised」) という言葉には、ロレンスの批判が籠められている。「結晶化」とも訳されるこの言葉には、『恋する女たち』で、ジェラルドが雪山

で「結晶化して」死んだときのように、「変化できなくて閉じてしまい死んでしまう」という意味があるからである。

しかし、結婚前にウォルターに魅力を感じたこともあった彼女なのだから、一日中炭鉱内部で危険な状況で仕事をした後で、地上に上がってきて酒を飲んで気持ちを紛らわせる炭鉱夫をなぜ理解できないのだろうか。夫は、妻の禁欲的な生き方が理論上は正しいのだが、彼にとっては非人間的であることを言葉では反駁することができず、妻の小言を我慢するしかない。このような抑圧状態が彼をして妻に暴力を揮わせ、そのことが一層妻の夫への嫌悪を募らせる。二人の間には果てしない闘争が繰り広げられるばかりである。

There began a battle between the husband and wife, a fearful, bloody battle that ended only with the death of one. She fought to make him undertake his own responsibilities, to make him fulfil his obligations. But he was too different from her. His nature was purely sensuous, and she strove to make him moral and religious. She tried to force him to face things. He could not endure it--- it drove him out of his mind. (SL23)

上の引用に見られるように、ロレンスは、ガートルードが理論上正しいからと言って彼女の存在を肯定している訳ではない。作者は、二人の性質の違いがあまりにも両極端に異なっているとして、どちらをも客観的に描いているのである。ウォルターが、妻と話している牧師に悪態をついたり、長男ウィリアムの髪を嫉妬のあまりみっともなく刈り取る場面にはウォルターの悲しみが表われていて、読者はガートルードと共に悲しむというよりもウォルターにも同情の念を禁じえない。髪を刈ることは象徴的に男から命を奪うことである。聖書中にもサムソンの髪を切ったデリラは彼の力を奪って彼を死なすことになる例がある⁽⁷⁾。このため、ウィリアムは成長してから出て行ったロンドンで、丹毒に罹って死んでしまうことになるが、ここに伏線があるのである。そして夫婦の戦いは激しさを増す一方であり、妻は夫を「あるがままの彼よりも高貴にしたいと思って彼女は彼を破壊した」(SL25)という状態に陥るのである。ウォルターは、祭りの日に友人のジェリーと一緒にノッティンガムへ出かけ野原では樫の木の下に横たわり健康そうに眠るが、この場面には彼のパン神的な様子が表われている (SL29)。また、彼の野原を散歩して楽しむ様子は、きのこ採りの場面にも見られる。彼は6時には家を出て、誰1人いない野原できのこを採るのが楽しみなのであった。きのこは「白い肉を持ったもの」(SL38)と書かれて、肉 (flesh) という言葉がウォルターの官能性を感じさせる。

野原にいるときも炭鉱内にいるときも彼は全くそれを自然な感じで受け入れており、まさに自然人であるという印象を与える。彼には家庭が合わなくて、そこではアウトサイ

ダーなのである。

夫婦の喧嘩において、ガートルードがウォルターに戸外へ追い出される場面を見てみよう。

She hurried out of the side garden to the front, where she could stand as if in an immense gulf of white light, the moon streaming high in face of her, the moonlight standing up from the hills in front, and filling the valley where the Bottoms crouched, almost blindingly. There, panting and half weeping in reaction from the stress, she murmured to herself over and again: “The nuisance!---the nuisance!”

She became aware of something about her. With an effort, she roused herself, to see what it was that penetrated her consciousness. The tall white lilies were reeling in the moonlight, and the air was charged with their perfume, as with a presence. Mrs Morel gasped slightly in fear. She touched the big, pallid flowers on their petals, then shivered. They seemed to be stretching in the moonlight. She put her hand into one white bin: the gold scarcely showed on her fingers by moonlight. She bent down, to look at the bin-ful of yellow pollen: but it only appeared dusky. Then she drank a deep draught of the sent. It almost made her dizzy. (SL34)

上の引用は、ガートルードがポールを身ごもっている身なのに、酔っ払った夫によって、夜の戸外へ追い出されてしまう場面である。彼女は白い月光に包まれ、そのときに白いユリの花を見て、白い光がそこからも出ているのを見て驚くが、その大きな鉄砲ユリの花の中に手を差し込む。ユリと彼女の交感の場面である。このユリは「白さ」が強調されており、聖母マリアの象徴である白いユリとガートルードの交感、彼女が処女のまま懐胎したかのような印象を与える。つまり、生まれたポールと彼女との結びつきが堅固になるであろうことを予測させる。

II ガートルードとポールとミリアム

ポールは、ガートルードとウォルターの仲が絶望的なほど決裂していた時に生まれた。母親は、彼女の父親が使徒ポールを崇拝していたために、次男をポールと名づけたと思われる。しかし、ポールは精神的に母親の性質を受け継いでいるが、肉体的な特質としては父親の性質を大きく受け継いでいる。単に男としてという意味ばかりではなくて、ポールは、父親ウォルターと同じように、パン神の特徴を備えているのである。同じ男でも、必ずしもパン神の特徴を受け継いでいる男ばかりとは限らないのであるが。

先ず、ポールと父親の共通点としては、ダンスが好きであること、野原が好きであるこ

と、肉体的に働く男性に惹かれていること（「僕はトロッコが好きだ。トロッコには男の雰囲気があるから。なぜならそれは男の手で動かされるから」というポールの言葉がある。SL152）、両者が「火」や「闇」と関連づけられて書かれていること、官能的な性愛を求めること等が挙げられる。ガートルードとウォルターが喧嘩をして、ウォルターが引き出しを引き抜いてガートルードに投げつけたとき、引き出しの角が妻の額にぶつかって血が流れる。この場面は象徴的である。ガートルードの額から滴った血は、赤子ポールの髪に吸い込まれる。この引用中には、頭と目と血の関わりが描写されているが、先ず、ウォルターはいつも妻の精神的な強さに反発して、その結果彼女の額（精神を表す）に引き出しをぶつけることになった、と読めるであろう。つまり、ガートルードの精神性が批判されていて「血」を求めることが必要な意味を表していると考えられる。ゆえに、彼女は均衡を取ろうとすると、これも「精神性」を表す目に血が流れ込む。更に、ウォルターは、この血を見て均衡を取り戻したと書かれ、彼が一旦は心を安定させたかに見えるが、自身の暴力に嫌悪を感じて最後には自身の「男性性」を無くすというように読める。また、ここでポールに関して重要なことは、こぼれた血が彼の髪に吸い込まれるという点である。つまり彼の頭（精神性）と血（官能性）の結合が見られ、ポールは単に母親の精神性ばかりではなくて、彼女が抑圧していた「血」の意識をも受け入れた男性として成長をしてゆく暗示が見られるのである。「均衡」という言葉が何度も繰り返されており、ロレンスの精神と血の均衡の哲学が表われていると思われる。つまり、ウィリアムの髪については、ウォルターが刈り取ってしまったために彼の「生命力」が遂には消えることになったのだが、ポールの場合には彼は生き延びてゆくという暗示が見られるのである。

しかし、ポールは幼い頃から母親に依存しており、また母親もウィリアムが亡くなった後では、ポールに恋人のような愛を抱くようになってからは、ポールも母親に取り込まれており、「ポールは父親を憎悪した。お父さんがお酒を飲まないようにしてください。神様、お父さんを死なせてください」（SL85）と書かれているように、父親にはひどく反発を繰り返す。しかし、これらの反発は、「お前が子供たちをおまえ自身のようにになるようにと吹き込んでいたんだな」（SL84）というウォルターの妻への言葉からも分かるように、母親がそのように子供たちを仕向けたせいでもある。ポールが14歳になって、ノッティンガムの外科医療器具工場です務めの仕事についてから、母親がポールに望みを託している様子は、『アラビアンナイト』（*Arabian Nights*）のようにポールが一日の出来事を彼女に話すとき、それはあたかも彼女の人生であるかのようなようだった」（SL140）という箇所やポールが「全てを母親のために行った」（SL142）という箇所にも表われている。そしてこの頃、ウォルターは肉体的にもだんだん萎んでくる。ロレンスは、年を取れば肉体が衰えるのは当然だということを言っているのではない。年とともに「成熟する」ということがあるのだが、ウォ

ルターの場合は「いやしく、さもしくなっていた」ということを述べているのである。これは、一つには、彼が精神的な強さを持つと努力することを放棄して自分との戦いから逃げてばかりいたせいであろうと思われる。つまり均衡がなくなっていたためと思われるが、先にも述べたように、もう一つには妻側からの夫の否定もあると思われる。

ポールは思春期になってウィリー農場のミリアム (Miriam) と親しくなるが、彼女は信仰深い母親の影響を受けていて、同じようにキリスト教に浸かっている。そして「レイディ」に憧れるが、ここにミリアムとガートルードの二人の共通点が見られる。そして両者ともが精神性が強く官能性を嫌悪する女性なので、自ずと支配欲が強くなっている。精神的に男性を掴もうとするのである。母親に掴まれているポールは、ここで新たにミリアムにも掴まれることになる。ポールにとってミリアムは、彼の魂を高めてくれる女性ではあるが、ポールのように官能性を重視する男性としてはそれを否定する女性とはいつかは決別することになる。次に、ポールが思春期になって官能性を表す「火」「炎」と結びついてゆく過程を表わすものの一つとして、ポールとミリアムがブランコに乗って遊ぶ場面があり、彼はブランコに乗っているときブランコの揺れそのものと一体化してしまう。ミリアムや彼女の兄弟たちは、ポールほどには我を忘れてブランコと一体化はできないので、ポールの肉体の自然体としての大きさが表わされている。このときミリアムは「彼女が彼女の中に温かさを点す炎であるかのように」(SL182) 感じるのである。彼は木の葉の絵を描くときにも外観ではなくて内側の「原形質である輝く揺らめき」(SL183)こそ命だと言ってそれを描こうとする。それを見つめるミリアムの目は「水のよう」(SL182)と書かれ、彼は彼女のこのようなまなざしを受けると、心で何かが縮じみ上がるように感じるのだが、ポールの持つ「火」の要素と反する「水」の要素が、ミリアムの本質だからであろう。ロレンスの作品では「炎」こそが重視され、「水」「氷」等の北方的要素は負としての「死」を意味する否定的な意味を担うことが多いのである。それゆえ、松の木を描くときにはそれを燃えている「赤い石炭」であると言い、「そこには神の燃える茂み」(SL183)があると言うのである。このように、「火」「炎」と関連づけられるポールは、まさしくウォルターの血筋を引いていると言えるであろう。

そして、ガートルードとミリアムの共通点として、二人がキリスト教の聖母マリアと関連づけられている点を見てみよう。ガートルードについては、すでに白いユリの花との関連でそのマリア的特質を述べた。ミリアムについては次のように書かれている。

All the life of Miriam's body was in her eyes, which were usually dark as a dark church, but could flame like a conflagration. Her face scarcely ever altered from its look of brooding. She might have been one of the women who went with

Mary when Jesus was dead. (SL184)

上の引用では、ミリアムも「炎」と関連づけられているが、すぐ下の引用のマリアとの関連から、この「炎」は彼女の熱烈なキリスト教への信仰心を表わしているものと思われる。ポールには、彼女の顔はいつも悲しげで、心から笑ったことがないように見える。それゆえ、「ポールはダンスをするときにはあちらこちらへと飛び跳ねるのだが、ミリアムはいつも規則正しいコースしか進まなかった」(SL185) というように彼女は既成の価値観を忠実に進むことになるのである。更に、ガートルードが「白い」百合の花と関連づけられているようにミリアムは「白い」バラの花と関連づけられている。その花は「聖なる」ものであり「白い、純潔の匂い」(SL196) を放っており、ミリアムは恍惚の状態であるが、ポールは「できるだけ早く逃げ出したくなった」(SL196) とあるように、ポールが無意識のうちにミリアムから逃げ出そうとしていることが分かる。更に、ガートルードの「白い百合の花」は「白い月の光」と関連づけられていたが、これと反対にポールの「炎」は「赤い月」と関連づけられている。

The whole of his blood seemed to burst into flame, and he could scarcely breathe. An enormous orange moon was staring at them from the rim of the sand hills. He stood still, looking at it. (SL215)

この場面は、ポールとミリアムが浜辺へ散歩に出て夕方帰路に着いた途中に見た月である。この赤い月を見てポールは血が沸き立つが、ミリアムは相変わらず精神的な状態で、ポールの官能性を怖がっているのである。このように「赤い月」はポールの官能性をかき立てるものである。

母親は、ポールがミリアムと付き合うようになると、不機嫌になり、ポールとも言い争うようになる。母親にとってはミリアムは「バンパイア」的存在である。

She could feel Paul being drawn away by this girl. And she did not care for Miriam. “She is one of those who will want to suck a man’s soul out till he has none of his own left,” she said to herself, “and he is just such a gaby as to let himself be absorbed. She will never let him become a man, she never will.” So, while he was away with Miriam, Mrs Morel grew more and more worked up. (SL196)

上の引用中、「吸い取る」という言葉に「バンパイア」的なイメージを感じ取れる。しかし、ミリアムを非難するガートルードは、自身も同じようにポールから命を吸い取ろうと

していることに気がついていないのである。そしてポールは、「性交という言葉には吐き気を催すほど、そのようなことに嫌悪を覚える」(SL198) ミリアムにだんだん失望してゆき、遂には彼女と別れてクララ (Clara) と付き合うようになるのである。ミリアムは、彼の「安らぎと自然さ」(SL217) を損なってしまうからであった。そして「太陽が彼から消えてゆきつつあった」(SL218) という状況になる。「太陽」は彼には命そのものである。彼が誕生したとき、母親は、夕暮れ時に、美しい太陽を野原に立って見て、赤子のポールを太陽に向かって差し出した。このときの太陽は異教的な太陽を思わせるのだが、太陽とポールとの秘密の契約が出来上がったかに思える場面である。彼は太陽の申し子なのだ。その太陽が母親とミリアムの歪んだ愛によって彼から消えてゆこうとしている。彼は唯ミリアムばかりでなく、母親の彼女に対する嫉妬にも苦しんでおり、その額には「苦悶の刻印」(SL231) が表われるのだが、この頃彼は「両者 (ガートルードとミリアム) に挟まれてやるせなく希望がなかった」(SL231) のである。

ポールは、ミリアムとのつき合いについてクララに話し、二人の話題はいつもキリスト教の神秘についてばかりだと不満を述べている。そして彼は遂に彼女と肉体的な関係を持ったが、それはミリアムが自身を犠牲に差し出しているかのような性愛であり、ポールには満足を与えなかった。前々からミリアムを「尼僧だ」と呼んでいたポールは、遂には彼女と別れる。ポールから別れを告げられたミリアムは、彼を「四歳の子供」と呼び、彼女のマグナ・メイタの要素を明らかにし、この言葉にショックを受けたポールは「二人も母はいらない」と叫ぶ。ポールは、このようにして彼の魂を吸い尽くそうとする「吸血鬼」的な女性からつまり精神的な「白い」女性から脱出してゆくのである。

Ⅲ クララとのつき合いを経て「父」を目指す

ミリアムから女性としての満足を得られなかったポールは、クララという新しい女性とつき合い始める。彼女は既婚の女性であり、彼よりも約6歳年上である。彼女は彼が大人の男性になり、善なる闇の世界を認識するのに大きな助力をしており、彼は母親が死んだ後で、「ポール」としてではなく「モレル」と作者に呼ばれるようになり、その成長を感じさせる。このため、闇は彼とクララの関係を通じて肯定的で善なる意味を獲得しているのである。

“I like darkness,” he said. “I wish it were thicker---good, thick darkness.”
(SL330)

上の引用は、ポールの言葉であり、深ければ深いほど善だという「善なる闇」という、キリスト教に反した概念がすでに唱道されている。これは『恋する女たち』におけるバーキンが唱道するのと同じ思想である。

また、この頃彼は「母親を憎悪し彼女から自由になりたがっていた」(SL389)と書かれているように、母親の束縛から離れようともがいている。「闇」への新たな認識は、精神的な母親よりも官能的な父親へとポールが傾倒していくことを意味していると思われる。

クララとの初期のつき合いの段階において、彼は宇宙との交感を持つ。これは『チャタレー卿夫人の恋人』について」において、ロレンスが述べている宇宙の律動と合わせて人間が生きることの意味をすでにポールが体験していることを表わしていると思われる。

ミリアムやガートルードの世界が「白い花」で表わされるのに反して、クララの世界は「赤い花」で表わされており、これは生きている炎の世界であり、言い換えればロレンスの求める「血と肉」の世界であることが分かる。それゆえに彼女の肉体（乳房や腕や首等）がいきいきと描写をされている。たとえば彼女が真紅の赤レンガ色のカーネーションを身につけているとき、ポールは彼女を「道を歩く真っ赤な固まり」と言う。次にカーネーションの場面を引用してみよう。

When she arose, he, looking on the ground all the time, saw suddenly sprinkled on the black wet beech roots many scarlet carnation petals, like splashed drops of blood. And red, small splashes fell from her bosom streaming down her dress to her feet. (SL355)

上の引用は、ポールとクララが始めて性交をした後の出来事であり、カーネーションの散った花びらが赤い血に喩えられている。それはクララの胸から落ちたのであって、クララの血を連想させる。ポールがクララによって「男」を堪能したことを表わしていると思われる。

ポールは、クララとの性交において「情熱的な一種の火の洗礼」(SL399)を受ける。この「情熱の火の洗礼」は、ミリアムが、ポールがそれを望んでいると知っていながらも与えられなかったものである。「火の洗礼」を受けたことは彼が大人の男性として自信を持ったことを表わす箇所である。キリスト教の「水の洗礼」に対立する概念といえよう。

ポールはクララ自身を知ったのではなくて、彼女を介して「ある偉大な力」を知ったかのように書かれているが、ロレンスにおいては、性愛を通して宇宙との交感を成すことが意味のあることなのである。ゆえにクララという個人的な女性を知ることが二の次なのである。二人の性交の場面を見てみよう。

And he put his face down on her throat, afraid. What was she. A strong, strange, wild life, that breathed with his in the darkness through this hour. It was all so much bigger than themselves, that he was hushed. They had met, and included in their meeting the thrust of manifold grass stems, the cry of the pewits, the wheel of the stars. (SL398)

上の引用では、性愛を通じて、男女二人は個人としての相手を認識するというよりも、草やタゲリや星々の旋回と一体になって宇宙と交感するのだということが描かれている。それゆえ、人間は自然と一体になっているので「野生的な見知らぬ命」となる。宇宙と一体になった人間は、個を超えて大きな存在になるのである。この大きな宇宙の力に包まれた二人は今度は謙虚になる。

It was for each of them an initiation and a satisfaction. To know their own nothingness, to know the tremendous living flood which carried them always, gave them rest within themselves. If so great a magnificent power could overwhelm them, identify them altogether with itself, so that they knew they were only grains in the tremendous heave that lifted every grass-glade its height, and every tree, and living thing, then why fret about themselves: they could let themselves be carried by life. And they felt a sort of peace each in the other: there was a verification which they had had together. Nothing could nullify it, nothing could take it away. It was almost their belief in life. (SL398)

以上の引用は、性愛を通じて男女二人が宇宙の生命力に包まれるとき、些細な悩みや事柄を忘れて、本来の命を蘇らせることを表わし、それゆえに性愛の必要性を述べている。人間は他の自然現象と同じ位置にあり、それよりも優っているのではないのだ、という謙虚さを述べている。更にこのような性愛の体験は二人に平和をもたらすという大きな意味を秘めている。ここにはロレンスの性の哲学が述べられ、これは『恋する女たち』や『鱗羽の蛇』や『チャタレー卿夫人の恋人』の主題に繋がるものである。

It was true as he said. As a rule, when he started love-making, the emotion was strong enough to carry with it everything, reason, soul, blood, in a great sweep like the Trent carries bodily its black-swirls and intertwinings, noiselessly. Gradually the little criticisms, the little sensations were lost, thought also went, everything borne along in one flood. He became, not a man with a mind, but a great instinct. His hands were little creatures, living; his limbs, his body were all life and consciousness, subject to no will of his, but living in themselves.

・・・・・・・・・・・・・・・・

It was as if he and the stars and the dark herbage and Clara were licked up in an immense tongue of flame which tore onwards and upwards. Everything rushed along in living beside him, everything was still, perfect in itself, along with him. This wonderful stillness in each living in itself, while it was being borne along in every ecstasy of living, seemed the highest point of bliss. (SL408)

上の引用では、トレント川、牧草、星、彼の肉体の全て、そしてクララが一体となって、意識という観念的なものが全て消えて、完璧な静けさの中で1つになっていることの恍惚感が述べられている。これこそが、性愛を通じての宇宙との交感なのであり、新たな生命力をもたしらしてくれる行為であり、ロレンスが理想とする生き方なのである。

しかしクララはポールとは違って彼という個人を知りたがり、自分のものにしたいという欲望が強く、ここにガートルードやミリアムやリリーと同じ女性の支配欲が表われていて、ポールはクララから離れたがる。彼は、「彼女（クララ）は、彼が牢獄に閉じ込められている感じを与えた」(SL403)し、ミリアムも「彼がロバのように杭に繋がれている感じを与えた」(SL404)ので、彼は二人とも彼にとって相応しい女性とすることが出来なかったのである。また、クララは、別居中の夫であるバクスター・ドーズに対しても、ガートルードと同じように、彼を本来の彼でないものにしがったので彼がそれを嫌がって逃げたのではないのか、というポールの指摘が書かれている。ポールとドーズの絡み合いがあった後、クララは、結局、再びドーズと縁を取り戻すことになるので、ポールは彼女とも別れることになる。

ポールは、クララとは別れることにはなったが、彼女との体験で「闇」の素晴らしさを知り、この闇は性愛の神である黒い神の顕現と考えても良いであろう。ポールはミリアムに、人生における「本物」について話したことがあった。

“It’s so hard to say--but the something big and intense that changes you when you really come together with somebody else. It almost seems to fertilise your soul and make it that you can do on and mature.” (SL362)

ポールは、上の引用に見られる「大きくて強烈なもの」を、ひと時ではあったがクララと一緒に体験したのである。ゆえに、彼は魂を豊かにし、前へ進む勇気を得たのである。更に彼は「偉大な神」という言葉を口にしている。

To him now life seemed a shadow, day a white shadow, night, and death, and stillness, and inaction, this seemed like being. To be alive, to be urgent, and insistent, that was not-to-be. The highest of all was, to melt out into the darkness

and sway there, identified with the great Being. (SL331)

上の引用の「偉大なる存在」は、『不倫』においてヘレナがシーグマンドの中に感じた偉大な男性的な神であるゆえに彼女が怖がって受け入れなかった神と同様の神と思われる大自然の中の神であり、人格神ではない。ゆえにポールが信仰すると思われるのはガートルードやミリアム等の女性たちと関わりが深いキリスト教の神ではないため、ポールとキリスト教との離反が暗示されていると思われる。

クララとの関係は、ポールに新たな局面を経験させ、彼を男として成長させてくれた。しかし、彼女も彼を所有したがる女性であり、いつも彼の肉体に触れたがる意味で、精神的な面の存在が薄く均衡を欠いた女性であったと言える。ゆえに、均衡を求めるポールは、彼女とも別れたのである。

結論

ポールは、母親が病気（癌）に罹ってかなりの間苦しんでいるのを見かねて、アニーと一緒にモルヒネを与えて安楽死させることにした。母親は、忘れな草色の青い目をしており、その目を見つめることはポールを苦しめた。忘れな草色の目は、ポールに自分をいつまでも忘れないで、と願う母の願望を意味していると思われる。

母親が死んだ後のポールは、死と生の境界をさ迷う。母親は、彼にとっては恋人にも等しい存在であったので、自分も一緒に死にたいという気にもなったが、一方で、生に対する強い執着もある。父親は、すでに肉体的な力が衰えており、内面の核がなくなっていたので、感傷的に妻の死を悲しんでいるようであったが、このような父親の姿はポールに嫌悪感をもたらすのみであった。そしてロレンスによるガートルードの死の象徴的な描写は、ポールが母親から解放されて、「父親」が本来持っているべきものを求めてゆくことを感じさせる。ポールは、母親の死に対して徐々に対処できてきて死に抵抗するのである。実は、母親の死は彼には苦悶であったが、彼は母親の死によって真に解放されることになったと言える。ガートルードが亡くなる日に、ウォルターは雪を踏みしめて炭鉱へ出発していた。

And in a few minutes Paul heard his father's heavy steps go thudding over the deadening snow. Miners called in the streets as they tramped in gangs to work.

.....

Far away over the snow sounded the hooters of the iron works. One after another they crowed and boomed, some small and far away, some near, the blowers of the collieries and the other works. Then there was silence.

.....

Still it was dark. Perhaps there was a lighter tinge. Perhaps the snow was growing blue. He heard a cart clanking down the streets. Yes, it was seven o'clock, and it was coming a little bit light. He heard some people calling. The world was waking. A gray, deathly dawn crept over the snow. (SL441)

上の引用で、ロレンスは、雪をガートルードが死につつある日と死んだ日に関連させて描いている。「雪」という言葉は5回繰り返されている。『恋する女たち』で、ジェラルドが雪に囲まれて死んでいった有名なオーストリアの場面と同じように、ガートルードは象徴的に雪に包まれて死んでゆくのである。雪はロレンスの作品では、キリスト教の精神的な世界を表わしている。パールの「善なる闇」の思想が、すでに多かれ少なかれ、彼の母親の死と交替しかかっている。これは彼にとってのキリスト教的な精神の世界が死にかかっていることを意味していると思われる。そして闇は彼に安らぎを与えてくれる。

The realest thing was the thick darkness at night. That seemed to him whole and comprehensible and restful (SL455)

そして再びこの小説の結末において闇の世界が示されている。

Now she was gone abroad into the night, and he was with her still. They were together. But yet there was his body, his chest that leaned against the stile, his hands on the wooden bar. They seemed something. Where was he?---one tiny upright speck of flesh, less than an ear of wheat lost in the field. He could not bear it. On every side the immense dark silence seemed pressing, so tiny speck, into extinct. Night, in which everything was lost, went reaching out, beyond stars and sun. Stars and sun, a few grains, went spinning round for terror and holding each other in embrace, there in a darkness that outpassed them all and left them tiny and daunted. So much, and himself, infinitesimal, at the core a nothingness, and yet not nothingness.

“Mother!” he whimpered, “mother!”

She was the only thing that held him up, himself, amid all this. And she was gone, intermingled herself! He wanted her to touch him, have him alongside with her.

But no, he would not give in. Turning sharply, he walked towards the city's gold phosphorescence. His fists were shut, his mouth set fast. He would not take that direction, to the darkness, to follow her. He walked towards faintly humming, glowing town, quickly. (SL464)

『息子と恋人』再考

前にも述べたように、母親の象徴は肯定的な意味と否定的な意味の両面性を備えている。上の引用中の闇は、母親の否定的な面である「死」の意味を表している。ポールの心は危険な状態にあるけれども、彼は拳固を握り締める。拳固というのは彼の闘争心を意味している。彼が赤子のときに握り締めた拳固が彼の1回目の誕生のときに描かれていたが、今母親が死んでから握り締めた拳固は彼の2回目の誕生を意味していると考えられる。「町の金色の燐光色」は人工的な光を表しているのではなくて、「燐光」はユニコーンとライオンについて書かれた「王冠」のエッセイに登場するように象徴的な闇の世界を表していると考えられる。ポールがクララとの関係から得た「善なる闇」は、彼が肉体と胸が重要であると思うようにと導いてくれた。これは、ある意味で肉体の再生であると言えるであろう。『息子と恋人』においては、闇のイメージが繰り返され表われる。闇は両面的な意味を持っている。ロレンスは、『息子と恋人』を書くことによって、旧世界を変化させることが出来る「善なる闇」という独創的な思想を生み出したのである。この新しい思想は後期の作品では「黒い神」の思想へと発展していくのである。

この独創的な闇の思想は、ポールと父親ウォルターを結びつけるものである。なぜならロレンスの闇の思想は性愛と結びつく官能性に関わっているからである。更に、ポールが、母親と議論したときに、母親の考える「紳士階級」よりも「庶民階級」を重視するという考え方から、母親の厳格な中・上流階級よりも父親の属した温かな下層階級世界を選んでいることが分かるのである。

※ 本稿は平成16年7月に発表した ‘A Study on the Germ of “the Dark God” in *Sons and Lovers*’ (愛知大学文学会『文学論叢』第130輯) を、新たな視点に立って大幅に書き直したものである。

注

- (1) Kuttner, A. B., “A Freudian Appreciation,” in *D. H. Lawrence and ‘Sons and Lovers’* ed. by Tedlock, E. W. Jr. (New York University Press: 1965), p.100.
- (2) Weiss, D. A., “The Mother in the Mind” in *D. H. Lawrence and ‘Sons and Lovers’* ed. by Tedlock, E. W. Jr. (New York University Press: 1965), p.134.
- (3) Pollnitz, C. ‘Raptus Virginis’: The Dark God in the Poetry of D. H. Lawrence in *Centenary Essays*, ed. by Kalnins, M. (Bristol: 1986), p.54.
- (4) Pollnitz, p.44.
- (5) Pollnitz, p.44.

- (6) Merivale, P. *Pan the Goat-God*. (Cambridge, Massachusetts: 1969), p.196.
(7) *The Holy Bible*: New International Version (Hodder and Stoughton: London, 1973, 1978,1984),
“The Book of Judges,” 13–16.

引用文献

- Lawrence, D.H. *The Letters of D.H.Lawrence Vol. I* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979).
———. *Sons and Lovers*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1992).
———. *Lady Chatterley’s Lover & A Propos of Lady Chatterley’s Lover*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1993)
———. *The Letters of D. H. Lawrence Vol. II* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981)
———. *Phoenix II* (London: Heinemann, 1969)